

編集後記

本年3月28日音楽家の坂本龍一さんが71歳で亡くなられた。坂本さんと言えば、音楽グループ「イエロー・マジック・オーケストラ」(YMO)のメンバーとしてシンセサイザーを弾いてテクノポップとして世界で注目を浴び、大島渚監督の映画「戦場のメリークリスマス」では俳優としてデビッド・ボウイさんやビートたけしさんと共演すると共に幻想的なオリエンタル調の主題曲を担当し、映画「ラストエンペラー」では日本人初の米国アカデミー賞作曲賞を受賞し、話題になった。ロックが好きな筆者も当時はテクノポップの出現に困惑したが、今改めて彼らの音楽を聴き直してみると、メロディが素晴らしく曲の構成も実によく練られており、西洋人の東洋人に対するイメージを皮肉って作成されたというメッセージも伝わってくる。更に彼は音楽だけでなく、社会運動にも参加しメッセージを寄せていた。途上国の債務帳消し、平和を願う非戦、地雷廃絶、地球環境保全、反原発、最近では神宮外苑再開発の見直しなどを求める運動にも関わった。特に、本号の書評で紹介している、筆者も加わった日本でのアフリカなど重債務貧困国の債務帳消しキャンペーンにも参加し、新聞などマスコミを通じて債務帳消しの必要性のメッセージを寄せてくれたことは心強かった。坂本さんは、音楽活動だけでなく、社会運動にも関心も持ち参加してくれた稀有まれな芸術家といえる。「芸術は長し、人生は短し」という言葉を残し、去り際も見事だった。心からご冥福をお祈り申し上げたい。

さて本号の特集は、「グローバル・サウスから見たラテンアメリカの動向」として2名の専門家の方からご寄稿いただいた。

最初の松下論文は、「ウクライナ問題」で日本とは異なる対応を行うラテンアメリカの左派政権の現状、課題、展望を述べ、グローバル・サウスとしてのラテンアメリカの米国の裏庭からの自立と異議申し立てのあり方について議論している。LAにおける新しい左派運動は、大国間の現実主義の枠を乗り越えていけるのかを注目したい。

第2の特集、小池論文は、ブラジルのルーラ政権の新開発モデルを明らかにしている30頁に及ぶ論文である。開発モデルの変遷、22年のブラジル総選挙と新政権の誕生の背景、新政権の開発モデルと課題、今後の展望を論じており、この論文を読めばブラジルのルーラ政権の概観を把握することができる。今後ブラジルがルーラ政権のもとでメルおよびボルソナロ政権で後退した民主主義への道を再び歩むことが期待される。

続く、大津論潮は、コロナ禍で苦闘する韓国の政治経済の動向、主要候補李在明と尹錫悦との大統領選挙の動向、その後の尹錫悦政権の様相について議論している。「旬の過ぎた新自由主義」「目覚めてみれば後進国」と言われる尹錫悦政権は、1980年代式の新自由主義の呪縛から脱することができるのか、日韓関係のあり方を含めて目が離せない。

その後、仲田コラムは、フィリピン NGO と歴代政権との関係について、フィリピン NGO MNKF の人道支援活動を通して紹介し、フィリピン NGO の独立した組織の理念に基づく活動の必要性について強調している。

続く岡野内書評は、松下例著『ポスト資本主義序説—政治空間の再構築に向けて—』の構成、本書の醍醐味、読者に問われるものについて紹介し、どのように「政治空間の再構築」を行うのか、グローバル社会運動が、ローカル政治空間での人々との議論(公共圏)を足場とする重層的なものでなければならないという評者の指摘に強く共感する。

重田書評は、ベン・フィリップス著/山中達也・深澤光樹訳『今すぐ格差を是正せよ!』の内容・意義、本書の課題について述べているが、本書が学術書ではなく、ベン・フィリップスという NGO を渡り歩いた市民活動家による実践書であることに注目したい。

福島書評は、栗本英世、村橋勲、伊藤未来、中川理編著『かかわりあいの人類学』の議論の出発点である人間と人間の「かかわりあい」の重要性を指摘しているが、評者のいう通り、地域研究としての人類学と社会学との協働も視野に、今後の「かかわりあいの人類学」の発展に期待したい。

最後に、今回の本誌の編集作業は、福島浩治理事(編集担当)により行ったことを付記する。

(2023年4月 編集長 重田康博)